

社会で求められる英語力とは—英文メディアの現場から

三澤美奈子
(NHK国際放送局)

NHKでは、国際放送のNHK World TVで英語による海外発信を行っている。その中のNEWSLINEというニュース番組では、国内外で発生したニュースを24時間、生放送している。ここで働く記者・ディレクターは、日本国内の記者が取材したものを英語の原稿にしたり、自分で取材して生放送やVTRでレポートをしたり、あるいはスタジオでキャスターとかけあいで出演したりもする。

日本国内には英文ジャーナリストを養成する機関はない。したがってNHKで独自に英文ジャーナリストを養成するわけだが、その方法としては現場でひたすら原稿を書いてもらい、それを経験のあるデスクなどが添削するということに尽きる。体系的な研修というよりは、オンザジョブトレーニングである。原稿は、たくさん書いていただくようになるというのが研修担当者の実感である。

放送用の原稿とは新聞や雑誌の記事と違い、話し言葉に近い。何度も読み直すということができないため、耳で1度聞いただけでわかるように構成されていなくてはならない。そのためにはボキャビュラリーは簡単なものを用い、文章も短くして、関係詞などをできるだけ省くことが求められる。

ストレートニュースの原稿については、主にNHKの国内の記者が日本語で書いた原稿を英語にしている。これはただの翻訳ではない。日本のニュースを世界の視聴者にわかりやすくするために背景説明を加えたり、情報を補足する必要がある。

NHK World TVに配属されてくるのは英語能力が一定のレベルに達している人だが、英語が話せるからといってテレビ用の放送英語原稿が書けるものでもない。外国の要人が何を言っているのか理解できるリスニング力、各種の文書等を読む文法力、そして原稿を書く文章力はかなり高度なものが要求される。また、英語力だけではなくジャーナリストとしての知識や判断力も要求される。しかもテレビは速報性が命。瞬時に書けなくてはいけないので、日本語で聞いたものを同時通訳並みに英語にできるようになったら一人前とされる。さらにテレビの英文ジャーナリストとしては、文章を書くだけではなく、しゃべる力も要求される。発音は、放送に耐えうるレベルのものが必要となってくる。こうした能力も当初からすべて備わっている人は少ないので、デスクらの指導のもと経験を積んでいくことになる。

このようにして英文ジャーナリストを養成するのだが、その際の問題点も多い。①以上のことをすべて理解して、一人前に原稿が書いてレポートもできるようになるためには通常は数年がかかる。しかし、ようやく一人前になった頃にほかの部署に異動してしまうことがある。②日本国内の英文メディアの分野が狭いため、英文ジャーナリストを養成する機関がなく、しかも放送で言うとNHK Worldは日本唯一の対外発信メディアのため、情報交換したり切磋琢磨できる機会がない。③元の原稿が日本語で

あることが多いため、どうしても翻訳調になりがちという点が指摘される。

解決策だが、①については最近、一度他の部署に異動した人が再び配属されるようになっているので、今後もそれが継続し、ノウハウを広く伝えていけるようになることが望まれる。②の解決策は、英文メディア他社との人材交流などを通し、切磋琢磨する機会を作ることが考えられる。③の解決策としては、NHKの記者やディレクターを海外に研修に出したり、海外から演出面での知識や経験を持った人を積極的に登用するといったことを、もっと広げられたら理想的だと思われる。

このような英文ジャーナリストを抱える現場から大学の英語教育への要望としては、高度な実用的な英語力を持つ学生を養成してほしいということ。聞く、話す、書くのすべてが一定のレベル以上であることが望ましい。

その英語力の養成方法だが、たとえば英語ニュースなどを素材にしてディクテーションをし、それを要約し、それについて自分の意見をまとめて英語で発表、さらには他の人の意見に反論や意見を述べるということをしてみるということをしてみるという。テレビのジャーナリストとしては、話せることは必須であり、発音もきれいな方が有利であるので、そうしたところも訓練する必要がある。あとは、英文をとにかくたくさん書くことが重要なので、日々文章を書いてそれを添削してもらおうとよい。

ポキャビュラリーも必要となることは言うまでもない。また、英文ジャーナリストとしては英語力とともにジャーナリストとしての力も必要なので、幅広い分野に興味を持って世の中のしくみ、時事問題、法律、経済、文化などについての見識があることが望ましい。そのためにも日本語や英語を問わずたくさん新聞を読むと良い。新聞を読むことでニュースの知識が深まるだけでなく、ニュース英語のポキャビュラリーが身に付いたり、ニュースで使われる文章構成への理解が深まっていく。

アメリカなどでは多くの大学にこうしたことを指導するジャーナリズム学科があるが、日本でもこうした学科が増えればと実感している。その中で、英文ジャーナリストを養成するようなコースがあったらベストだ。

日本の英文メディアが経済力にあった存在感かどうか。残念ながら答えはノーではないか。私自身、海外の人に「日本人がどういう人たちかというイメージがない」と言われてしまうことがたびたびあった。その原因は、日本のメディアも一般の人も、これまで積極的に対外発信してこなかったということがあるのではないだろうか。

現在はBBCやCNNなどの従来からある米英の国際放送だけではなく、カタールのアルジャジーラ、中国のCCTV、フランス24など、いろいろな国が国際放送に力を入れている。それだけ、自国のことを海外で知ってもらおうということにメリットを感じている表れではないだろうか。海外でビジネスを行う日本の企業の人も、国際放送で日本を知ってもらおうことで、海外とのビジネスチャンスにもつながると期待を寄せている。今後もさらにこの分野での競争が激しくなることが予想される。

では、どうやったら日本のメディアの存在感を増すことができるのか。

NHKの取り組みとしては、NHK World TVを放送する衛星でカバーできるエリアを増やす、海外でのNHKの視聴可能なホテルを増やす、番組を海外の放送局に売る、ケーブルのチャンネルに入れてもらうなどの努力を重ね、視聴者を獲得してきた。

しかし今はなんといってもインターネットが鍵を握る。インターネットや携帯をどううまく使って情報発信していくか、我々は岐路にたっているのではないか。

ネットは速報性というテレビの特性とも重なる。すでにテレビとネットを連動させて、番組からネットにアクセスしてもらったり、逆にネットからテレビ番組を見てもらうように誘導しているが、まだまだ他にもいろいろな可能性を秘めていると思われる。

国内の他の英文メディアとも連携して、日本をさらに世界に発信していきたい。